

近代日本（1868～1945）における身装電子年表

高橋晴子 中川 隆 久保正敏
大阪樟蔭女子大学 国立民族学博物館

本身装電子年表は、明治元年から第二次世界大戦終結までの日本における近代の衣文化を対象として構築したものである。この時期は和装と洋装がせめぎ合った、日本の衣生活にとっては貴重な時期であるにもかかわらず、学術的な年表が欠落している。本年表では、事柄を「事件」と「現況」にわけて記述することにより、風俗現象としての身装のあり方を表現しようと試みた。「事件」では、特定のある日時に起こった事件を正確な時系列で記述している。「現況」では、事件とちがって事の始まりと終わりが明確でない事柄を文字と画像によって記述している。本年表は国立民族学博物館のウェブサイトより発信している<服装・身装文化データベース>のサブデータベースのひとつとして公開している。

A Digital Chronology of the Fashion, Dress and Behavior from Meiji to early Showa periods(1868-1945) in Japan.

Takahashi Haruko Nakagawa Takashi, Kubo Masatoshi
Faculty of Liberal Arts National Museum of Ethnology
Osaka-Shoin Women's University

This paper describes a digital chronology with images of fashion, dress and behavior from 1868 to 1945 in Japan. This period when kimono and western style of dress contended with each other, was a very important time for Japanese clothing culture. The chronology is divided into two columns entitled "Events" and "Contemporary Conditions". The former, have precise dates given and therefore function in the same way as the general timeline. On the other hand, "Contemporary Conditions" in the latter show clothing culture more generally and include fads which cannot be connected to exact dates. It will be available through the National Museum of Ethnology's website under the heading "Costume Database".

1. まえがき

1984 年より MCD プロジェクト[1]は、国立民族学博物館のウェブサイトから、世界の衣服とその文化にかかわる<服装・身装文化データベース>を公開してきた。本紙で紹介する「身装電子年表（1868～1945）」を含めて、現在の本データベースの内容は表 1 の通りである。画像・文字データの合計件数は、約 22 万点である。

標本と文献のサブデータベースを作成するにあたり、多くの文献・画像資料を収集・分析してきたが、これらの資料のなかには、近代日本における新聞のアーカイブズ資料が大量に含まれていた。このアーカイブズ資料を利用することによって、身装研究が欠落している日本における近代（1868～1945）史を電子年表の形式で補うことができると考えたのである。

表 1 <服装・身装文化データベース>

標本

- 1) 衣服標本
- 2) アクセサリー標本
- 3) デジタル・エスノグラフィ（フィールド写真であり、2008 年度のマヤ衣文化から始まる）

文献

- 1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）
- 2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）
- 3) 服装関連外国語雑誌記事
- 4) 服装関連日本語図書
- 5) 服装関連外国語民族誌

身装電子年表（1868～1945）

2. 「身装—身体と装い」の概念

まず、「身装」の概念をおさえておきたい。「身装」とは、われわれ MCD プロジェクトの造語であり、「身体」と「装い」のふたつの言葉を合成したものである。その意味するところは次の通りである。人が衣服を着装する目的のうち、その文化的機能は、1) 個人的魅力の他人へのアピール、2) 自分の所属を示すサインである。ここで「服装」という概念が生まれるが、その服装ですら、ひとりの人間についての視覚的イメージのうちでは、必ずしも支配的な部分とはいえない。一般に人が他人を視覚的に評価するポ

イントは、まず顔を中心とした頭部であり、第2が服装を含めての全体的な容姿であり、第3に身体の動き―振る舞い・しぐさなどだろう。さらに実生活での「身装」を考えると、それはつねに具体的なシーン（情景）のなかでの認識となり、その情景を、ある時代の文化的環境がとりまいている。このように、「身装」は着装した人間を中心として、同心円的に広がっていく概念であり、文化的環境までも含んでいる。

たとえば、1873年に地方の交通と道路の状況の記事(東京日日新聞 1873/10/13(2面))があるが、地方ではまだ人力車が普及せず、値段も高いし道も悪いとある。このような道路の状況は、当時の履物等旅装束の様子と当然関係してくるのである。

3. 近代日本の身装電子年表

従来の総合年表や専門年表の風俗・文化に関する記述からは、ある年のいくつかの例は理解できても、「これが当時の服装だ」ではなく、これもそうだしあれもそうだという日常的な全体の様相を把握するのは難しい。このような衣文化の態様を表現するには、事柄に関するテキストと画像を、時系列に表示できる電子年表の形が最も適している。

本電子年表の作成目的は、おもに次の3点である。

- 1) 「近代日本のある時期、これこれの人々は、どんな身装をしていたのか」という具体的なイメージを文字と画像によって時系列に提供する。
- 2) 和装と洋装がもっとも緊張した関係にあった近代の80年間の文化変容を明らかにする。
- 3) 近代身装文化に関する研究の発展のためだけでなく、映画等のシーン作りにも役立てたい。

なお、現在の検索可能な文字データは約13,000件、画像は約300件である。

3.1 身装電子年表の構成

本年表では、事柄を〈事件〉、〈現況〉、〈回顧〉にわけて考えている。身装という風俗現象は、ある状況がときには幾世代にもわたって続いていく性質と、気まぐれでとどまることのない変化を見せる性質のいずれをも備えている。

また、風俗現象である身装は、現象自体が特定の日時に限定されるような性質のものではない。たとえば、昭和14年～16年にかけての大都市では、40才以下の女性の多くがパーマネントをかけるようになっており、それが戦時下の日本において議論の対象になったのは紛れもない事実である。しかし、そうした現況の流れは、特定の年次の枠にいろことはできない。



図1 年表の表示例

このような性質をもつ身装年表を、年ごとに記述する歴年記述の方法をもって記するには無理がある。以上の問題点を回避する改善の策として、現在の年表の枠組みを図1のように考えている。

1) 年表の枠組み

①<事件>—普通の意味での年表であり、特定の年ある日時に起こった事件を正確な時系列で記述する。

たとえば、「1873年3月20日、天皇断髪し、3日、皇后・皇太后は鉄漿、黛を廃す(郵便報知新聞3月43号(2)、新聞雑誌83号)」,あるいは、「1924年7月31日、贅沢品に対する輸入税の引き上げ。その内容についての大蔵省発表。毛皮、皮製品、香水、香料、鼈甲、珊瑚、真珠、石鹸、化粧品等。(読売新聞7/31/(4面),8/1/(4面))」など。

②<現況>—事件とちがって、事の始まりと終わりが明確でない事柄を、文字と画像によって記述する。その時代の人々の具体的なイメージを提供するとともに、その時代の基底的・総合的な情報も提供する。事項は、資料の出典の刊行年月順に配列している。

たとえば、1873年11月の新聞に次のようにある。「人々の頭髮が一樣でないことを憂いて、だれもが帽子を被るようにする案(郵便報知新聞10/24/<投書>)に対して、帽子の案は一層の苦情混乱のもととなるだろう、それより断髪を例を厳しくすべきである。新潟県では楠本県知事の着任によって説諭が行き届き斬髪が一般に行われ、かつ男女が手拭いを被って往來する弊風も消滅している(郵便報知新聞11/16/<投書>)」,あるいは、1924年には、「明るくなった東京婦人、髪かたち着物の好みの変化。顔の化粧はエジプト風に眉を細くすりさげて、眉頭より眉尻を下げてひく墨の色もくっきりとして、臉の周囲にほんのりとかぶ紅色はやや濃く、唇を横一風にリンカクをはっきりと見せてひくのがパリジャン好みの女に迎えられている(都新聞2/10(9面))」,同じく1924年に「最近では西洋では、フロックコートはごく田舎でなければ着なくなった(都新聞3/8(9面))」など。

③<その年の情景>(現況画像)—各年の身装の状況を視覚的にとらえ、当時の様子をイメージしやすくするために、補助的に掲載している。画像の主題は「景観」、「未婚女性」、「既婚女性」、「男性」、「子ども」、「美しい人」であり、各事例を年ごとに掲載した。

④<回顧>—現在のシステムでは、画面の面積の関係からこの欄は組み込んでいないが、近い将来、公開を実現したい。

あとになって過去のことを思い出し、「昭和初

期の頃」のような表現で記されている事柄は時系列の枠(暦年枠)には入れにくいし、信憑性も薄い。これらは主題別、たとえば「素材」、「衣服改良・改良服」などに分類し、そのなかで大枠の区分によって検索を可能にしたい。

3.2 事柄に関するテキストと画像

1) テキスト

事柄に関するテキストは、原則として同時代資料より、身装の概念に該当する記事を選定した。採録の対象となった、主な資料は次の新聞と雑誌である。『東京日日新聞』、『曙新聞』、『郵便報知新聞』、『毎日新聞』、『朝日新聞』、『読売新聞』、『平仮名絵入り新聞』、『東京絵入り新聞』、『国民新聞』、『都新聞』、『やまと新聞』、『時事新報』、『萬朝報』、『女学雑誌』、『以良都女』、『風俗画報』、『家庭雑誌』、『都の花』、『新小説』,および『新衣裳』、『時好』などの各種百貨店カタログである。事柄を要約し、すべての事柄の出典を明らかにしている。さらに、事項の約1/3は全文テキストを掲載している。

2) 画像

画像は、<現況>に関連した画像を、同時代資料より採録した。現在の主たる資料は、信憑性の高い新聞連載小説挿絵である。とくに明治中期(1880年代後半を中心とした10数年間)の新聞連載小説挿絵は、身装画像データとしての有用な地位をしめている。この時は、わが国の身装発展史上きわめて重要な、話題の豊富な期間であつたにもかかわらず、数少ない風俗版画や、撮影の時期も人物も定かでない肖像写真のたぐい以外に、具体的な画像情報が掲載されている同時代史料が乏しい。このような状況のなかで、新聞連載小説の挿絵が、テキストを伴う指示性の高い身装画像情報として、同時代資料となりうることを検証した[2]。当該期間の新聞連載小説の多くは、実話が下敷きとなっていたこと。作家も挿絵画家も新聞社の社員の身分であり、一般大衆の好みを常に反映することに努力を惜しなかったこと。また、当時は衣装の資産価値が高く、小説などにおいてもその衣装付けに詳しかったこと。さらには、当時の挿絵画家は作家のテキストにそって忠実に挿絵を再現したこと。一方、その時代の素朴な読者は、自分たちの世界を物差しにした狭い範囲ではあるが、衣食住についての描写に違和感があれば、すぐに文句を新聞社に直接に投げかけていたことなど、これらの事実が、新聞連載小説挿絵の信憑性を証明した主な要因である。

したがって挿絵を利用するための小説は、原則として、掲載とほぼ同じ時期を舞台とする現代小説に限定した。

3) 文化変容にかかわる重要テーマの抽出

資料を収集・分析しながら、身装の文化変容にかかわる 33 テーマを抽出した。すなわち、日本の身装の西洋化・近代化の基準からみた重要テーマである。テーマの内容をまとめると、次の通りである。「流行論・階級観など身装の社会的評価」、「衣料品等の価格、既制服、所有数などの経済的背景」、「婦人雑誌、海外情報などの情報一般」、「衣料業界」、「道路・街」、「衛生・健康観」、「衣服の各種アイテム」、「髪型」、「化粧」、「着装する人の職業や身分」などである。これらのテーマは、検索キーとして有効に働くと考えている。ゆくゆくデータに付与し、統制された検索キーとして実現する予定である。

4. システム構成と機能

本システムは、Web ブラウザを使用して年表を表示する表示システムと、そのためのデータを作成・編集するための編集ツールとからなる。ここでは、画面表示例をもとにこれらの機能の概要を紹介する

4.1 表示システム

表示システムの画面は、ヘッダー部と年表表示部からなる。(図 1)

ヘッダー部の右には、キーワードを指定するためのテキストボックスがある。ここにキーワードを入力すると、各事柄に付加された属性項目のうち、タイトル、記事内容、出典・典拠、キーワードといった項目に入力されているデータが検索され、ヒットしたもののだけに絞った年表が、下の年表表示部に表示される。

年表表示部は左から、〈スクロールバー〉、〈年代表示〉、〈現況〉、〈その年の情景〉(現況画像)、〈事件〉の欄から構成されている。

〈事件〉は通常の年表と同様の形式であるため、以下では、これ以外の欄について概略を紹介する。

〈スクロールバー〉では、年表の収録範囲全体にわたって大きくスクロールさせることができる。小さくスクロールさせるには、スクロールバー以外の箇所をドラッグする。

〈年代表示〉には、年単位(レンジによっては、月単位)の目盛りがあり、背景色が薄くなっている箇所がカレント年を示している。カレント年に対応する事柄が、〈現況〉、〈その年の情景〉、〈事件〉の欄に表示される。また、〈年代表示〉には当該年/月に含まれる記事の数をドットで表示している。検索を行った後にこれを見れば、記事の分布状況が一目で分かる。この欄の上にある〈長〉〈中〉〈短〉のボタンにより、年代表示部分

のレンジを、50 年程度から数年程度まで切り替えることができる。

〈現況〉欄には、記事の要約を枠で囲んで表示している。枠内右上のボタンをクリックすることにより、詳細な情報を吹き出しの形で表示させることができる。

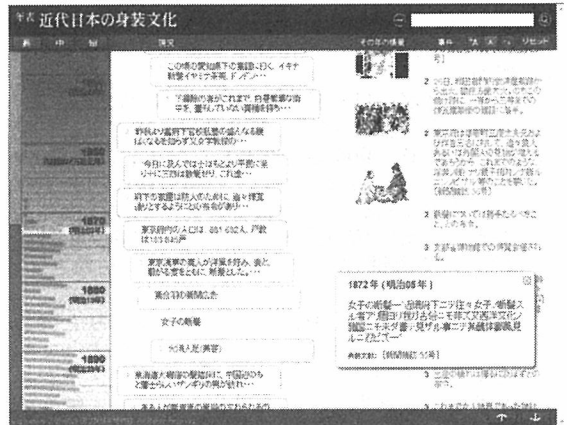


図 2 〈現況〉からの吹き出しの表示例

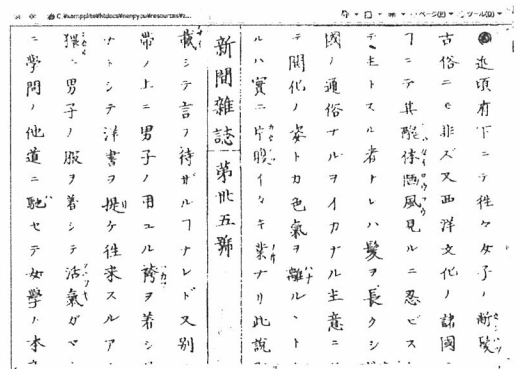


図 3 全文テキストの表示例

また、記事の全文テキストが用意できたものについては、全文テキストへのリンクを「*」として表示している。図 2 では見えにくいですが、記事の要約の右下に「*」が表示されており、これをクリックすると、図 3 のように、元となった記事をスキャンした画像が別ウィンドウに表示される。

〈その年の情景〉欄には、〈現況〉に関連した画像のサムネイルを表示している。これをクリックすることにより、解説が吹き出しの形で表示され(図 4 の上)、ダブルクリックすることにより拡大画像が表示される(図 4 の中央)。この拡大画像は、画像の下にある+やーのボタン、またはスライダーによりズーミング可能である。



図4 現況画像の表示例

現況画像の中の一部分（複数も可）に注釈が付けられている場合は、図5のようにウィンドウの左にアノテーション名の一覧が表示される。これをクリックすると図中に、該当部分を示す枠が表示される。

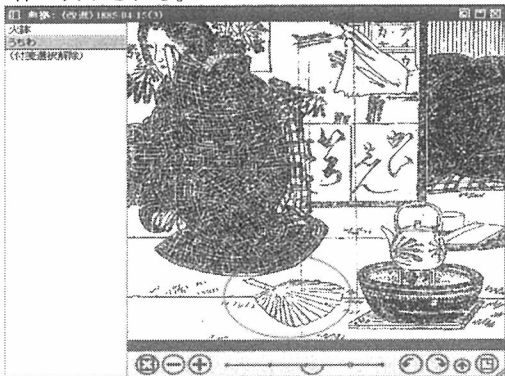


図5 現況画像へのアノテーションの表示例

以上が主な表示システムの説明であるが、本システムには、特定の年を URL 中のパラメータとして指定すると、当該年をカレント年として表示させる機能も用意している。さらに、本年表の各年の頭の部分には、外部のデータベースを呼び出すためのリンクが用意しており、「年」をパラメータとして外部データベースに渡すことができる。

4.2 編集ツール

本年表のように複数の欄からなる、少し込み入ったデータを作成するには、最終結果にできるだけ近い形を見ることができる編集ツールがあると入力ミスも少なくなり、都合がよい。本システムでは、次のような専用の編集ツールを用意した。

まず、編集ツール本体は、図6に示すように、デフォルトでは、3つのエリアに分かれており、左に<索引ツリー>、中央に<年表表示エリア>、右に<属性入力エリア>という構成をとっている。

<索引ツリー>の上半分には年代、下半分には、上で選択した年代の全事柄（<現況>、<その年の情景>（現況画像）、<事件>）のリストが表示される。年表中の事柄は、年・月の順に並べられるが、月が同じ事柄については、このリスト中でドラッグ&ドロップすることにより、または、後で述べる属性中の順序の項目に値を入力することにより、表示順序を指定することができる。

<年表表示エリア>は、前述の表示システムで Web ブラウザに表示されるのとはほぼ同様の画面レイアウトで表示される。但し、年をまたがったスクロールはできない。<索引ツリー>の中から選択するか、<年表表示エリア>の各<現況>や<事件>の枠の左側をクリックすると<属性入力エリア>に入力画面が現れる。また、<索引ツリー>から現況画像を選択するか、サムネイルをダブルクリックするとズーム可能な拡大画像が中央に現れる。拡大画像を表示した状態で、画像の一部分に注釈を付けることができる。画像中の部分の指定には、矩形や楕円の枠の他、ラベル付きの引き出し線を用いることができる。

<属性入力エリア>の入力画面からは、西暦、月、分類、要約（タイトル）、作者、挿絵画家、出典・典拠、重要テーマ、キーワード、ノート、順序、公開等の項目を入力することができる。「公開」の項目を使うことによって、著作権等の問題で当面は公開することができないデータを、非公開としておくことができる。

本編集ツールでは、画像データ以外は、すべて SQLite により管理している。このデータベースでは、1つのデータベースが単一のファイルとしてパソコン中に作られるため、バックアップコピーの作成や、他のパソコンへのデータの移動が容易である。

編集ツールには、タブ区切りのテキストデータの入出力機能も用意しており、エクセル等を使って作成した初期データの一括ロード等に使える。また、差分でのアップデートを行う機能も設けているため、キー項目と更新箇所のデータだけからなるファイルを用意しておき、該当箇所のみを更新可能である。これにより、予め分担を決めておけば、複数のパソコンで、並行して入力や校正作業を進めることができる。

編集ツールは、上で述べた編集ツール本体の他に、通常の画像ファイルをズーム可能な形式に変換するツールや、編集したデータを表示システムに渡すための変換ツールなどからなっている。

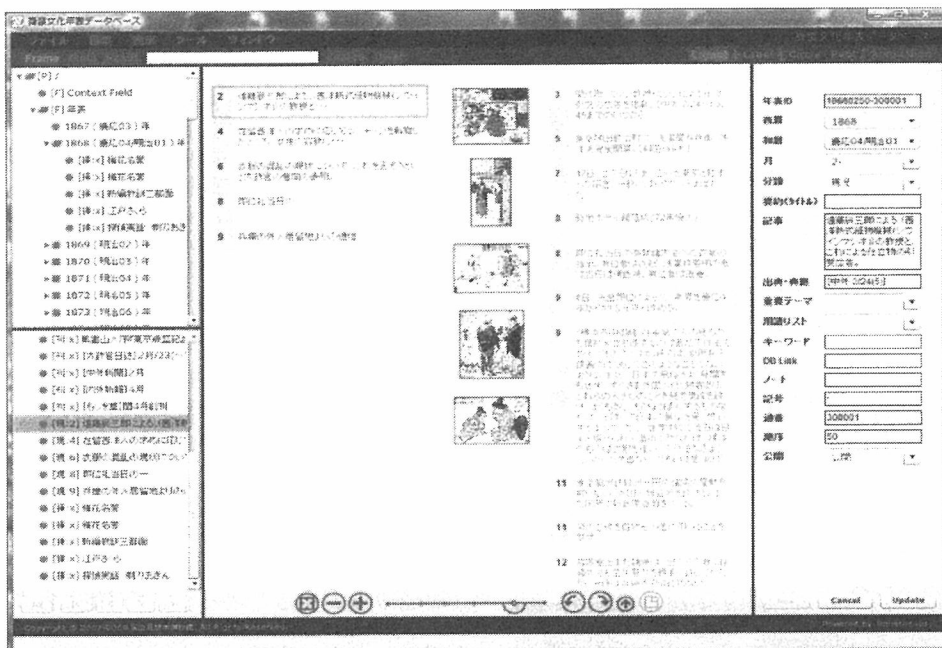


図6 編集ツール

5. あとがき

まずは、事柄の文字データについてであるが、〈事件〉・〈現況〉は一応の完成をみた。なお、〈回顧〉のデータは、〈現況〉にとっての補完的な役割を持っており、80年間の身装の全体像をさらに深く把握するためには必須である。今後、〈回顧〉の文字データをより充実させるとともに、現在のシステムとリンクする方法を考え、閲覧・検索を可能としたい。

また、先に述べた重要テーマの付与も実現しなければならない。

画像データについては、各年平均5枚×80年間で、合計400枚程度を用意したが、このうち、約100枚は現在著作権の関係上、公開不可能なため、必要に応じて順次、著作権処理を行っている。

一方、本年表より早くから取り組んでいる、近代日本の身装画像データベースは、本年表とのリンクを前提として現在構築されつつある。来年度中には準備を終え、年表との相互のリンクを実現したい。年表をデータベースへの一つの入り口とすることによって、慣れないデータベースを利用する際、キーワードとして何を入力したらよいか分からないという問題を解消する一つの試みとしたい。

また、〈服装・身装文化データベース〉のサブデータベースのひとつである「服装関連日本語

雑誌記事(戦前編)」ともリンクを図る計画をもっている。

さらには、国外での研究発表[3]を通して得た繋がりをキッカケとして、国内外の、分野を同じくするデータベース等との連携を図りたい。

注)

[1] 高橋晴子(大阪樟蔭女子大学)・久保正敏・中川隆・大丸弘(国立民族学博物館)・八村広三郎(立命館大学)・猿田佳那子(同志社女子大学)・田中昌美(愛知新城大谷大学)

[2] 高橋晴子. 近代日本の身装文化―「身体と装い」の文化変容. 三元社, 2005, pp. 20-40

[3] Haruko, Takahashi. A Digital Chronology of the Fashion, Dress and Behavior from Meiji to early Showa in Japan. Digital Humanities 2008. 6/2008, pp.278-279

謝辞

データの選択については、MCDプロジェクトのメンバーでもあり、国立民族学博物館・総合研究大学院大学の名誉教授である大丸弘先生に貴重なご意見を数多くいただいた。ここに、感謝の意を表したい。

また、システムの開発に多大なご協力をいただいた iPallet の津田光弘様にも、感謝の意を表したい。